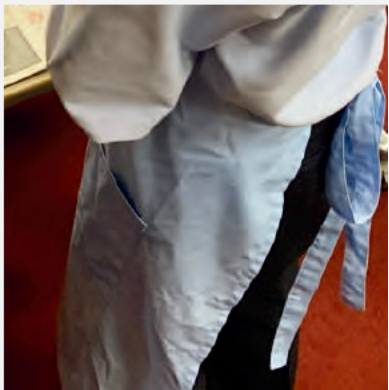
岡山県ユネスコススクール高校ネットワーク活動報告書
2024 Activity Report

Okayama UNESCO High School Network

食 × ESD×ユネスコスクール

unesco

Member of the Associated Schools Network



岡山県ユネスコスクール高校ネットワークについて

ネットワーク結成10年のその先を見据えて

岡山ユネスコスクール高校ネットワークは、2014年11月に岡山市で開催された国連ESDの10年の最終年の会合「ESDに関する世界会議」「Student（高校生）フォーラム」の企画運営を、岡山市の当時のユネスコスクール加盟校が中心となって担ったことが契機で創成されました。
同フォーラムでは、約30ヶ国から200名近い高校生が集い、大学生のボランティアスタッフたちも高校生たちの主体的な運営を支えるように伴走しました。約2年かけて研修と準備を重ね、3日間にわたる充実したディスカッションと交流の結果、無事に生徒たちによる「ユネスコスクール世界大会 Student(高校生)フォーラム共同宣言」を提出しました。※詳しい記録については岡山市のウェブサイトを参照→https://x.gd/studentforum
この経験と宣言を次に伝えながら、生徒たち・教員が交流し、お互いの学校から学び合い、それぞれの学校の実践を発展させることを期待して、先生方の提案によりこのネットワークが立ち上がりました。
2015年11月に第1回の実践交流会を岡山大学にて実施して以来、毎年幹事校が交替しながら、OBOGを含む学生スタッフと共に企画を進め、岡山市(RCE岡山）を始めとして多方面からの応援を頂きながら交流会を発展させてきています。実践交流会で単発的な交流をするだけでなく、各学校でのESDの実践に学びを活かしたり、新たな繋がりが新たな共同的な活動へと発展したり、卒業生が教師となって活躍したりしています。
2020年以後はコロナ禍にあって、各学校での様々なESD・ユネスコスクール活動が中断される危機もありました。そのような中、オンラインを活用しながら交流を続け、2021年はSDGsカレンダーをブルガリアのユネスコスクールと共同制作し、2022年はエコ・プロダクツづくりのワークショップを実施しました。2023年には防災をテーマとして各学校が防災グッズ、関連するゲームなどの出展を行い、マレーシアの先生方や高校との交流も実現しました。今年度は「食」をテーマとして、事前学習会で「地球の食卓」のワークショップを実施し、食にまつわる様々なグローバルな課題やローカルな実践について考え、実践交流会では各学校で探究してきた取り組みを共有し、学び合うことができました。
2025年現在、気候変動、災害、戦争、エネルギーなどの持続可能な開発の諸問題は複雑に絡み合いながらも、未だ多くの人にとっては解決の糸口がつかめないほどの壮大な（でも喫緊の）課題として迫ってきています。このような時こそ、改めて、10年前の高校生フォーラムで海外の高校生と共に議論を重ね、提出された共同宣言文を振り返り、その意味と価値、そして10年間の成果を明らかにすることで、今後の私たちの方向性が見えてくるのではないでしょうか。（文責：柴川弘子）

The Okayama UNESCO School High School Network was established after the ”World Conference on ESD” and the ”Student Forum” in Okayama in November 2014. This event, organized by local UNESCO schools, brought together nearly 200 high school students from around 30 countries, supported by university volunteers. After two years of preparation, the forum resulted in a joint declaration by the students.
Inspired by this experience, the network was created to facilitate ongoing exchanges and learning among students and teachers. The first exchange meeting was held at Okayama University in November 2015. Since then, the network has grown, with rotating chair schools and support from various stakeholders, including RCE Okayama. Activities have expanded to include practical applications of ESD in schools, fostering new collaborations, and supporting alumni who become teachers.
Despite the COVID-19 pandemic, the network continued its activities online. In 2021, they co-created an SDGs calendar with a UNESCO school in Bulgaria. In 2022, they held an eco-products workshop, and in 2023, they focused on disaster preparedness, collaborating with schools and teachers in Malaysia. This year, the theme is ”Food,” with workshops and exchange meetings exploring global and local food-related issues.
As of 2025, the network continues to address complex and urgent issues such as climate change, disasters, wars, and energy, reflecting on the achievements of the past decade and planning for the future.

Text:Hiroko Shibakawa

岡山県ユネスコスクール高校ネットワークの構図
The structure of our network

ネットワークでは、例年11月に実践交流会を開催し、各学校のESDについて共有し、交流を続けてきました。毎年の学習テーマは、持続可能性に関わり、高校生にとって最も身近で関心のある内容に設定しています。最近では高校生コアメンバーと学生スタッフ、先生方皆で年度当初に協議し、決定しています。

事前学習会は、実践交流会に関連づけて企画されます。これは実践交流会が単発イベントに終わってしまわないための仕組みです。加えて、年度末に何らかの形で各学校からの活動報告を提出しています。こちらも実践交流会での学びを、各学校での活動に活かしていくための仕組みです。

This picture shown above outlines the structure and activities of the Okayama UNESCO High School Network. Each November, the network holds an exchange meeting to share and discuss ESD practices among schools.

Learning themes are chosen based on relevance to sustainability and student interest. Pre-learning sessions are organized to ensure continuity and effectiveness of the exchange meetings.

The network is managed by a rotating chair school, with support from Okayama University and student volunteers, including alumni. Activities include workshops, poster presentations, and collaborative projects, with representative teachers providing guidance and support through a dedicated platform e.g. LINE Open Chat/Google Docs.

Our team 2024
事務局紹介

幹事校：おかやま山陽高校
木戸聡・岡本麻由

事前学習会、実践交流会ともに学校の垣根を越えた交流の意義を改めて感じる時間となり、多く学ばせていただきました。生徒から「他校の人とも仲良くなれて楽しく活動ができた」という感想を聞くことができ嬉しく思っています。1年間ありがとうございました。

岡山大学大学院教育学研究科
ESD協働推進センター
柴川　弘子　（ネットワーク顧問）

ネットワークの設立から10年となりました。プログラムも少しずつ変化し、試行錯誤しながら進められる感じや、色々な立場の人で一緒に作る面白さはとてもユニークだと思います。何より生徒の皆さんの笑顔や一生懸命な様子を見ること、垣根を越えて語り合う姿が見られる学習会・交流会が魅力だと感じます。大変なことは多いかもしれませんが、大事にしたいことは皆一緒で、共に生きる学び、自分自身と社会を変容させる学びをこれからも一方ずつ進めていけたらと思っています。

学生スタッフ

2024年度は、主に事前学習会や実践交流会の企画、運営のサポートをしました。高校生が主体的に学べるように高校生の企画をブラッシュアップすることや学生スタッフが高校生とは違う視点のワークショップを行うことで、より深い理解ができるように手助けすることも学生スタッフの役目だと考えています。
今後はよりいっそう交流会等を盛り上げられるように、学生スタッフ一同頑張っていこうと思っています。

学生スタッフの声

「高校生が真剣に話を聞く姿や積極的に交流する姿を見てほっこりします！」

「より幅広い年代の人と関わることができ新しい視点を得ることができました」

紹介ポスター

学習テーマ＆企画プロセス

6月中旬: 学習会の日程・会場の決定
- 岡山市SDGs・ESD推進課と連携
- 各学校でのコアメンバー決定・顔合わせ会

7月中: 事前学習と実践交流会のテーマと目的について打合せ
- 大学・顧問・幹事校で数回

8月: 事前学習会　事前学習会の振り返り、11月実践交流会に向けて企画

9月・10月: 各学校での食に関する学習実践をポスターにまとめ、ワークショップの内容を企画する

11月: 実践交流会　実践交流会でのポスター発表とワークショップ
- 各学校に学んだことを還元し、ニューズレターでネットワークに共有

3月: ニューズレター提出

The planning process for the Okayama UNESCO School High School Network involves several key steps:

- Mid-June: Decide dates and venue for learning sessions, collaborate with Okayama City SDGs and ESD Promotion Division, and determine core members with introductory meetings at each school.
- July: Discuss themes and objectives of pre-learning and exchange meetings through multiple meetings with universities, advisors, and chair schools.
- Late August: Review pre-learning sessions and finalize plans for the November exchange meeting.
- September-October: Prepare food-related sustainability learning at each school, create posters, and plan workshops.
- November: Conduct poster presentations and workshops at the exchange meeting, sharing outcomes with each school.
- March: Submit a newsletter summarizing the year's activities and outcomes.

参加した生徒の声

- 「一緒に物を作ったりするのは楽しい!」
- 「ワークショップ形式が良い!」
- 「知識も必要。誰かに話を聞いてみたい!」
- **「他校の生徒ともっと話がしたい!」**

This structured approach ensures organized, collaborative, and impactful activities, fostering ongoing learning and exchange among students and teachers.

Participanted Student's Feedbacks

"It's fun to create things together!"
"Workshop format is great!"
"Knowledge is necessary. So I want to hear from some experts!"

"I want to talk more with the students from other schools!"

事前学習会“未来の食卓”

日時：8月23日（金）13:00～16:00
於：岡山市勤労者福祉センター　5F 体育集会室

事前学習会では、グローバルな視点で「未来の食卓」を考えることを目的としました。食に関する問題は、フードロスのみならず、多岐に渡り、より幅広い視点が必要だと考えたからです。

まず、恒例となった幹事校（おかやま山陽高校）の生徒たちによるアイスブレイクでスタートしました。特に、「以心伝心ゲーム」をグループ対抗で行う頃には打ち解けた和やかな雰囲気に。

メインのワークショップでは、今回は学生スタッフがモデレーターとなり、「地球の食卓」（開発教育協会）の教材を用いて、フォトランゲージという活動を行いました。世界各地の家庭の一週間の食材を公開した写真から、できる限り様々なことを読み取り、互いに共有するワークでは、食をめぐって、文化、消費生活、紛争、環境問題、宗教、など様々なことを考えられる可能性が見えてきました。その後、豆知識として50年間の食に関するイノベーションを理解し、それらの革新がもたらした功罪について理解を促しました。そのうえで「未来の食卓」ー近い未来、15年後にどんな食事をしたいか、あるひとつの理想のランチメニューを描くワークを行いました。地産地消やオーガニック、旬、など色々な要素がちりばめられた素敵なメニューが並んでいました。

The pre-learning session aimed to explore "The Future of the Dining Table" from a global perspective, addressing diverse food-related issues beyond food loss. It began with an icebreaker by Okayama Sanyo High School students, fostering a friendly atmosphere.

The main workshop, moderated by student staff, used "Hungry Earth" materials to conduct a photo language activity and discuss food innovations over the past 50 years.

Participants then envisioned ideal lunch menus for 15 years into the future, incorporating elements like local production, organic ingredients, and seasonal foods.

実践交流会
Exchange Meeting 2024

日時：2024年11月18日（日）10:00～16:00
於：岡山県国際交流センター　国際会議場
プログラム：

10:00 開会　おかやま山陽高校　原田一成　校長先生
10:10 アイスブレイク（おかやま山陽高校生徒）
10:30 イントロ（学生スタッフ）
「ユネスコスクールのスキルとハート－”共創”について」
11:20 ポスターセッション　（40分）
13:00 「食」をテーマとしたワークショップ
14:30 ワークショップ終了・片付け
15:00 振り返り・アンケート記入・閉会式
次年度幹事校　岡山県立和気閑谷高等学校　赤松一樹　校長先生

"Cultivating Sustainable Futures: Food, ESD, and UNESCO Schools in Harmony"

Highlights

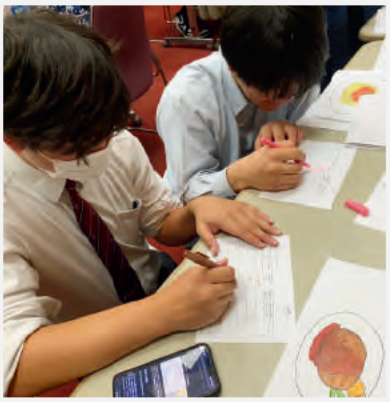
おかやま山陽高校の生徒によるアイスブレイクは、事前学習会よりもさらにパワーアップされていました。最初は静まり返っていた会場も、あっという間に熱気に溢れ、和やかな話しやすい雰囲気になりました。ESDとして大切な「相手の立場に立って考える、想像力を働かせる、他者の言葉をよく聞く」といった姿勢を促す工夫が満載でした。

ポスターセッションでは、各学校のESDの取り組みを1枚のポスターにまとめ、5分以内で発表し、2分以内で質疑応答を行いました。参加人数に応じて各学校を2つのグループに分け、1グループが発表し、他のグループが聞く形式で進行。同じ発表を3～4回行うことで、より多くの発表を聞くことができました。

ワークショップは「食」をテーマに、各学校がブース出展の形で内容を公開し、効率よく体験できるよう工夫しました。今年度も多彩な内容で、ゲーム、クイズ、試食、アート体験などが準備されていました。また、学生スタッフも初めて出展し、フードマイレージに関する楽しいワークショップを行いました。

ESD協働推進センターのウェブサイトにも報告を掲載しています。
短縮URL：https://x.gd/FwXIP　または　QRコード →

"Collaborative ESD and Creative Food Sustainability Engagement"



The icebreaker by students from Okayama Sanyo High School was significantly enhanced compared to the pre-learning session. Initially quiet, the venue quickly became lively and friendly. The activities encouraged important ESD attitudes such as thinking from others' perspectives, using imagination, and listening carefully to others.
During the poster session, each school summarized their ESD initiatives on a single poster, presented within five minutes, followed by a two-minute Q&A. Schools were divided into two groups, with one group presenting while the other listened, allowing more presentations to be heard by repeating the same presentation three to four times.
The workshop focused on "Food," with each school setting up booths to showcase their content efficiently. This year, a variety of activities were prepared, including games, quizzes, tastings, and art experiences. Additionally, student staff participated for the first time, conducting a fun workshop on food mileage.

2024　岡山県ユネスコスクール高校ネットワーク　実践交流会　「食」×ESD×ユネスコスクール　ワークショップ　内容一覧

岡山県立和気閑谷高等学校	岡山県立岡山一宮高等学校	清心女子高等学校	岡山県立矢掛高等学校	岡山龍谷高等学校	霊雀丘学園
缶詰を使ったメニューの試食	・『シトラスリボンって？』 一緒にシトラスリボンを作って、シトラスリボンプロジェクトについて学びましょう！	難民と食品ロスに関するボードゲーム	様々な食料問題を解決するカードゲーム2つ『Problem Solver』『廃棄部分ナニナルンジャ!?』	『Let's enjoy playing karuta !』 魚カルタを通じて瀬戸内海の魚について詳しくなろう	農家人生ゲーム このゲームをすれば、もっと農業に興味がわきます！

朝日塾中等教育学校	岡山県美作高等学校	岡山県立林野高等学校	おかやま山陽高等学校	岡山市立岡山後楽館高等学校	ユネスコスクール学生スタッフ
個性派野菜が変身！！（廃棄される食材に関するクイズゲーム）	「ぶどうの皮🍇」の染め物＆「卵の殻🥚」を使ったキーホルダー作り 	フードドライブボーカー～子どもの食堂で料理を作る人の目線になって考えよう！＝君が料理人だ！＝～	①食べ残し削減を啓発「缶バッジ」を制作するワークショップ ②紙芝居の発表 ③クイズ	解き明かそう、岡山県版気候変動のミステリー！	『あなたの選ぶもので、世界は変わる？！』フード・マイレージについて、大好きなメニューを通じて体験しながら学ぶワークショップです。一緒に楽しく学んでみませんか？

【参加した生徒の感想より】

- 今回のようなワークショップなどの機会があると、自分たちがワークショップをする側になっても沢山の知識をつけたりすることができて、聞いたり体験もすることでより学びを深められると思います。
- 今回、「食」というテーマで参加して、フードロスから地産地消まで多くのことを学ぶことができました。特に様々な「コ食」という言葉は興味を持ちました。個食、濃食、固食・・・と様々なコ食の中にある問題に１つでも取り組めればなと思いました。
- 普段は学校内で活動がメインなので、他校のことを知る良いきっかけの場所になりました。実際にインタビューを行って自分達でレシピを考えて実践したり、子ども食堂でボランティアなど自分達にもできそうなこと、身近なことから”ちりつも”で日々意識することで解決の糸口になることに気づけた。大学生の方々のワークショップでいかに日本の食料自給率が低く、私達が輸入食品を日常的に食べているか気づけた。
- 鳥取西高校がユネスコスクールであることを実感し、このような機会に招いてくださったことを大変ありがたく感じた一日でした。西高校では「ユネスコスクール」としての活動で、目に見えるものはほとんどありませんが、他校が「ユネスコ部」などをはじめとして、多くの取り組みを行っていることに大変刺激を受けました。
- 他校との交流の機会が普段はないので、新鮮で良い経験にもなりました。今まで知らなかったポスター発表の仕方（質問に対して説明していく）を見て、今度ポスター発表の機会があるので参考になりました。（※ユネスコスクール以外の学校の生徒のコメント）

- *"Opportunities like these workshops allow us to gain a lot of knowledge, even when we are the ones conducting them. Listening and experiencing deepen our learning."*
- *"Participating with the theme of food, I learned a lot about food loss and local production for local consumption. I was particularly interested in various 'Ko-shoku' terms like individual eating, dense eating, and solid eating. I hope to address at least one of these issues."*
- *"Usually, our activities are within the school, so this was a great opportunity to learn about other schools. Conducting interviews, creating recipes, volunteering at children's cafeterias, and realizing how low Japan's food self-sufficiency rate is through university workshops were eye-opening."*
- *"I felt grateful to be invited to this event, realizing Tottori Nishi High School is a UNESCO school. Although our activities are not very visible, I was inspired by other schools' initiatives like UNESCO clubs."*
- *"We rarely have opportunities to interact with other schools, so this was a refreshing and valuable experience. Learning about poster presentations (explaining in response to questions) was helpful for my upcoming presentation."*

A total of 12 workshops were conducted, involving 11 schools and student staff. These workshops featured a variety of activities, such as tasting dishes made from discarded canned food, engaging in games related to food security issues, and participating in simulations to understand farmers' lives. Additionally, there were quizzes on climate change specific to Okayama, games about local marine life, and creative projects using food waste. These hands-on experiences allowed students to deepen their understanding of the topics and effectively share their knowledge with others. The experiential approach facilitated a more profound engagement with the material, fostering a comprehensive learning environment. The students' feedback highlights the significant impact of these workshops, emphasizing the value of practical learning and interactive methods. Here are some excerpts from their comments, showcasing the diverse and enriching experiences they had during the workshops.

岡山県ユネスコスクール高等学校ネットワーク
学生スタッフ

私たちについて

私たちは、ユネスコスクール加盟校出身で岡山県内の大学に進学した学生で構成されているグループです。

【活動拠点】

岡山大学大学院　教育学研究科　ESD 協働推進センター

【活動内容】

岡山県内のユネスコスクール加盟校、キャンディデート校の高校生が交流する事前学習会、実践交流会の企画、運営のサポートをしています。

※岡山県ユネスコスクール高等学校ネットワークとは

2014 年に岡山市で開催された ESD に関するユネスコ世界会議・高校生 (Student) フォーラムを経て、このような生徒たちの交流と学びを継続・発展させていくことを願い、先生方が 2015 年に発足させた組織。毎年 11 月頃、世界会議の成果を次に伝え、お互いから学び合い、学校や地域を超えた仲間を作り、ESD を推進するための「実践交流会」を開催。

年間の活動スケジュール

4 月
学生スタッフの新メンバーとの顔合わせ会

5 月
ユネスコスクール顧問会議・ESD 研修会の補助をしつつ、ESD について学び、ネットワークの方向性について理解する

6 月
各学校のコアメンバーの話し合いをサポート
（今年度取り組みたい内容について、高校生から出た意見に基づいて、学生スタッフでも意見を出し合い、関連するテーマについて学び合います）

8 月
事前学習会

10 月まで
実践交流会に向けた準備（打ち合わせ等）

11 月
実践交流会

3 月
各学校が作成したニューズレターの取りまとめ
ユネスコスクール顧問会議・ESD 研修会に出席し、反省、振り返りを共有し、次年度へ引き継ぎを行います

4 月まで
報告書冊子作成（ユース活動の報告）

活動紹介

① 事前学習会

事前学習会は、実践交流会に先駆けて、設定したテーマに関してより深く学び合う学習会です。最近では、「エコ」「防災」「食」などのテーマで、学生が高校生の学びが深まるようにワークショップを行ったり、講師の先生から震災の経験について学んだりしています。2024 年度では、『「食」×「ESD」×「ユネスコスクール」～一緒に前に一歩踏み出そう ～』というテーマで食に関するワークショップ（開発教育協会による「地球の食卓」を用いたフォトランゲージ、〝未来の食卓〟を皆で描くワーク etc.）などを行いました。

2024 年度 事前学習会について
詳しくはこちら ▶▶

2024 年度 事前学習会の様子

写真右端から：ユネスコスクールの理念や ESD のスキルとハートについて伝えるレクチャー、フォトランゲージの様子、グループワークの様子、食の変遷に関する豆知識のレクチャー

学生スタッフの声

高校生が真剣に話を聞く姿や積極的に交流する姿を見てほっこりします。「新たな気づきがあった！」「もっと交流したい！」といった声を直接もらうことがあり、毎年やりがいを感じます！

ワークショップをするために色々準備したりすることも大変なこともありますが、イベント内で参加した高校生、学生スタッフ、みんなの笑顔が見れることが何よりの代えがたいものだと感じています。

② 実践交流会

実践交流会は、各学校での ESD・ユネスコスクール活動をポスター発表形式で紹介したり、ワークショップ形式で、それぞれ取り組んできたテーマに関わる学びを、お互いに紹介し合いながら、交流を深める会です。

学生スタッフの役割

- 高校生が ESD について理解を深められるような機会を設ける
- 高校生が学ぶテーマをどう深めてあげられるかを考える
- 学生スタッフもワークショップを開き、教えることで学びを深める

（2024 年度の実践交流会では、フード・マイレージについてのワークショップを行いました）

2024 年度 実践交流会の様子

学生スタッフの声

実際に高校生が中心となって考えたアイデアを互いに共有し合える貴重な場作りをサポートしながら、色々な視点を得ることができます！楽しみながら学ぶことで一人一人のモチベーションが高く、互いに良い刺激を与え合っています！

高校生のときにこの交流会に参加していて、高校生の語学力だったり、プレゼンのやり方がすごい伝わりやすいものを展示しているので負けないように頑張らねばと毎回思っています。やはり運営する側も難しいこともありますが、高校生の笑顔や感想でいい会にできたんだなと思うので学生スタッフで良かったです。

大切にしていること

- 高校生が主体になる学習会はどのようにすれば可能か
- 高校生がお互いに学び合うにはどのような手立てが必要か
- 高校生がそれぞれの学校や地域で ESD を深めていくためには、どんな学習会・交流会にするべきか

学生スタッフとしての研修機会

私たちはこれからも他の地域で行われているイベントに積極的に参加します

2024 年 1 月に東京で行われた UNESCO WEEK 2024（ユースフォーラム 2024）に参加しました

学生スタッフの声

より幅広い年代の人と関わることができ新しい視点を得ることができました。地域ごとで特性やアピールポイントが違うので、それぞれの活動の類似，相違点を見つけることで自分達の活動をより良いものにしていくことができると感じました！

私たちとつながりませんか？

課題

高校生主体で進めるべきところに、学生スタッフや教師が介入しすぎている印象があるので、学ぶ側（参加している生徒）と運営側（学生スタッフや教師）のあり方をより考える必要がある。

学生スタッフのあり方も考える必要があると思う。貢献するだけではなく、それがどう今後に生きてきて、持続的な学びに繋げられるかを考えていきたい。

会の成功を目指すあまり、高校生の学びの場が削られている可能性があるので、学びの場をどう作っていくのか考えたい。

ユネスコスクールの活動をサポートしている学生の方、課題の解決方法などについて共有したり意見交換して頂ける方、一緒につながって何かできそうな団体の方、ぜひコメントをお願いします！

アンケートフォーム

CONTACTS

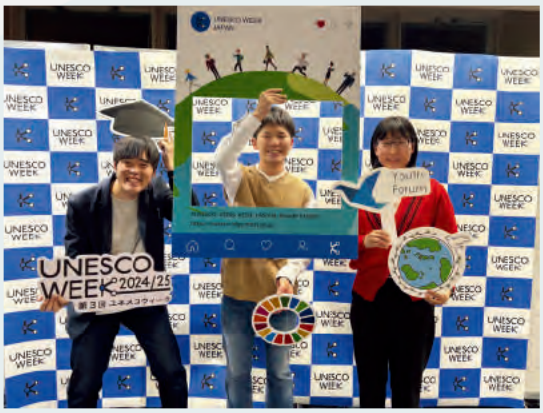
Email : okayama.ushsn.studentstaff@gmail.com
Instagram : https://www.instagram.com/okayama_ushsn_studentstaff/
HP : https://edu.okayama-u.ac.jp/esd/

E-mail　Instagram　HP

学生スタッフの活動紹介

UNESCO WEEK 2024/25 ユースフォーラム報告

Introduction of Student Staff Activities: UNESCO Week 2024/2025 Youth Forum Report



学生スタッフもESDやユネスコスクールについて学ぶ機会を持ち、全国・海外のユースと繋がれる機会を積極的に取り入れていこうと考えています。
2024年度は11月25日ー12月1日にかけて開催されたUNESCO WEEKに参加しています。

Student staff also have opportunities to learn about ESD and UNESCO schools, and they are actively considering incorporating opportunities to connect with youth nationwide and overseas.
In the 2024 academic year, they participated in UNESCO WEEK held from November 25 to December 1.

次世代ユネスコ国内委員会のメンバーでもある川上寛人さんは裏方スタッフとして、山下優佳さんと木崎達也さんは一般参加者として参加し、様々な学びを得ています。
大会の振り返りをこちらに掲載します。
是非ご一読頂き、学生スタッフの想いや学びに触れて下さい。

Kanto Kawakami, a member of the Next Generation UNESCO National Committee, participated as a backstage staff member, while Yuka Yamashita and Tatsuya Kizaki participated as general attendees, gaining various insights. A review of the conference is posted here. Please read it to learn about the thoughts and learnings of the student staff.

ユースフォーラム参加記
山下優佳（岡山大学グローバルディスカバリープログラム3回生　矢掛高校出身）

2024 年12月1日のユースフォーラムに今年も参加してきました。昨年とは異なり主な参加である若者中心の交流がたくさんありました。日々の生活の中で、子どもたちはいわゆる"大人の考え"、そしてそれらが成している社会の"常識"にとらわれてしまっている部分があると感じています。そんな中で、今回のユースフォーラムは、無意識に社会の常識に従い、その他の選択肢を持たずに大人になっていく子どもに対して強いメッセージ性があったと考えています。

最初の講演で、「グローバル基準の考えや教育が必要だ」と語っていらっしゃった方がいました。「グローバル基準」とは何なのか。教育も市場も美意識も西洋中心の価値視が流布している世の中、表示されていたスライドに書かれていた文章がイギリス英語だったことも踏まえて、ヨーロッパ中心の考えがグローバル基準とされている部分が少なからずあるのではないかと疑問に思いました。また、根本的に偏りのない視点を持ち得ない個人がグローバル基準を得ることは不可能であるのではないかとも感じます。つまり、一人の人間がグローバル基準で行動することは不可能で、一人一人がローカルで行動した集合体がグローバルにつながるのではないかと考えました。もし人間だれしも目の前の一つにしか行動を起こすことができないのであれば、何かを飛び越えて行動できないからこそ、一人一人の小さな行動にも大きな影響力や価値が見出すことができるとも捉えることができると思います。よって、よく聞く、「中立の立場」や「グローバル基準」はローカルや個人の力を越えて成しえるものではないということを理解するべきだと思いました。

次に、「若者が傾聴される仕組み」についてのお話に興味を持ちました。若者への政治 や世への無関心が懸念される中で、若者が傾聴される仕組み作りが必要だとおっしゃられていました。これを達成するには、若者が声をあげ、それらを聞く大人が必要です。「今の若者は...」とネガティブな発言を年配の方からよく耳にしますが、若者から言わせれば、「今の大人は...」と言いたいところでしょう。政治の裏金のことでいっぱいいっぱいの大人がメディアで大きく取り上げられ、学校や職場でのセクハラ、パワハラ、カスハラに忙しい大人たち。声を聴いてほしいと相談する大人を見つけるところから最難関です。とはいえ、確かに声を挙げる若者が少ないのも現実です。面と向かって大人に意見しなくても、選挙の投票権を行使するところからはじめてもいいと思います。

最後に、「未来を担う若者」についてです。「未来」とはいつなのか。過去の自分は未来に希望や夢や目標を抱くけれど、いざ未来にたどりついたらそれは現実になっていてあの時思い描いた「未来」にたどり着いたとは感じません。過去と現在と未来は切り離すことができないただの概念であると考えれば、現在できる小さなことでも続けていたら自分の近い未来に貢献できるということだと考えました。未来を担う若者とよく耳にしますが、あなたの未来を担うのはあなたでもあるということを忘れてはいけないと思います。

UNESCO Youth Forum Participation Report
Yuka Yamashita, Graduate of Yakage High School, the Discovery Program for Global Learners, Okayama University

On December 1st, 2024, I participated in the Youth Forum. Unlike last year I had joined, the forum featured active interactions initiated by young generations. It highlighted the unique perspectives of youths, who often navigate societal norms and expectations shaped by what you might call "adult thinking" and "common sense." The forum carried a powerful message for young individuals growing up within these societal frameworks, encouraging them to explore alternative perspectives and possibilities.

During the first lecture, one of the speakers emphasized the importance of "thinking and educating based on global standards." This prompted me to reflect on what "global standards" truly mean. In a world where Western-centric values often dominate education, economic markets, and aesthetics, I questioned whether values from Westerners are sometimes perceived as universal or normal. For instance, the presentation slides at the speech were written in British English, which made me wonder if European-centric ideas are frequently regarded as global norms. I believe that reaching out to a global standard is impossible, for people have different pictures depending on from what perspectives people see. Thus, I think that the accumulation of individuals acting locally could have the possibility for global impact. Even small, each individual effort can create significant influences and values, demonstrating the interconnectedness of local and global actions.

This realization underscored the importance of understanding your position—where you are looking from. There is no "neutral position" and "global standards" that are often discussed under the name of cool buzz words. Each individual's actions totally make a difference.

Another topic that caught my eyes was the discussion on creating "an environment for young people to be listened to." Amid concerns about youth disengagement from politics and global issues, the need for such an environment is evident. For this to succeed, young people should voice their opinions, and adults should actively listen to them. While older generations sometimes criticize youth with remarks like "Young people these days...," young people might similarly feel disappointed in adults. Media reports often highlight adults being busy with politicians' scandals and workplace misconduct, which can dirty trust. The challenge lies in finding adults who patiently listen to them. At the same time, it is crucial for young people to take the initiative, such as by exercising their right to vote, to make their voices heard.

Finally, I want to reflect on the idea of "young people shaping the future." When you think about the "future," it often feels like an abstract concept. In the past, you envisioned the future with hopes and dreams, but when you get to that point, it already becomes the present, often different from what you imagined. If you view the past, present, and future as interconnected, then even the smallest actions you take now can contribute to shaping your near future. While it is often said that young people are the representatives of the future, it is equally important to recognize that you are already shaping the present.

ユネスコウィーク・ユースフォーラム感想
木崎達也（岡山大学教育学部4回生　芳泉高校出身）

　2024年12月１日に東京で行われた「第３回ユネスコウィーク」の「ユースフォーラム」に参加しました。このイベントに参加するのは、前回（同年１月）に引き続いて２回目です。
午前中のパネルディスカッションでは、前回同様に「ユース世代」の方々が日本、そして世界で活躍されていることを知りました。「自分がユースとしてやりたいことは何か」や「自分だからできることは何か」など、自分のこれからについて考えるきっかけとなりました。
　午前と午後の間に行われた「ネットワーキング交流会」では、我々「学生スタッフ」の活動内容を紹介するポスターを会場に掲示しました。ポスターには、学生スタッフの活動についてだけではなく、それを行う中で感じている「課題」についてもあわせて掲載しました。 興味を示したくださった参加者の方との交流では、取り組みの説明をするとともに、私たちの抱えている「課題」を解決するためにどのようなやり方があるのか、貴重なご意見をいただきました。次年度の活動がまた始まるため、学生スタッフ間でも今一度在り方を検討していきたいと考えています。
　午後の分科会は、前回に引き続き「教育分科会」に参加しました。今回のテーマは「みんなでつくる『これからの学び』のカタチ」。まずは、2023年に示された「ユネスコ教育勧告」（教育全般に関する国際基準の文書）から、あらゆる教育段階に組み込むべき「14の主導原則」について講義を受けました。その後、テーマについて考えるグループディスカッションを行いました。グループメンバーは、自分と同じ大学生から現職の教員の方や民間企業に勤められている方など、世代も立場も異なる方々でした。私たちのグループでは、先述の主導原則から「主体性」や「創造性」に着目し、お互いに意見を交換しながら「これからの学び」について考え合いました。最終的にまとめた実現・実践のためのアクションプランは、多くの高校で現在行われている「探究学習」の場面で、「大学生やユース世代の社会人が高校生の学びに対する相談相手となる」というものでした。お互い年齢は近いが、異なる視点を持ち合わせていることから、双方が学び合い成長していけるのではないかと考えました。このことは、学生スタッフが行っている「事前学習会」や「実践交流会」の運営の面でも大切な視点であると思い、これからの企画・運営へのヒントを得ることができました。
　今回も、各地から集まった世代も経験も異なる方々と交流でき、大変有意義な時間を過ごすことができました。このフォーラムで学び得たことを基に、自分の強みを生かしてできることを考え、これから実行に移していきたいと思います。

Impressions of the UNESCO Week Youth Forum
Tatsuya Kizaki (Student Staff, Okayama University, Faculty of Education)

　I had the opportunity to participate in the Youth Forum during the 3rd UNESCO Week, held in Tokyo on December 1st, 2024. This marked my second time attending this event, following my participation in the earlier session in January of the same year.
　During the morning panel discussion, I gained valuable insights into the activities of young people in Japan and around the world, as I did at the previous event. This experience encouraged me to reflect on my own path—what I aspire to achieve as a young person and what I can uniquely contribute at this stage of my life.
　The networking exchange event, held across the morning and afternoon, allowed us to showcase posters detailing the activities of the student staff. These posters not only outlined our work but also highlighted the challenges we encountered along the way. Engaging with participants who expressed interest in our efforts, we shared our initiatives and received constructive feedback on addressing these challenges. As we prepare to embark on next year’s activities, we aim to revisit these insights and deliberate on our approach as a team of student staff.
　In the afternoon, I participated in the "Education" subcommittee, as I had in the previous forum. The theme this time was *“The Shape of ‘Future Learning’ Created by Everyone.”* The session began with a lecture on the *“14 Leading Principles”* outlined in the *UNESCO Recommendation on Education,* a 2023 document establishing international standards for education. Following this, we engaged in a group discussion exploring the session's theme. Our group comprised university students, current educators, and private-sector professionals, offering a rich diversity of ages and perspectives.
　Our discussion focused on the principles of *“independence”* and *“creativity”* from the *14 Leading Principles,* and we shared our thoughts on shaping "future learning." The action plan we developed involved *university students and young professionals serving as advisors to high school students in their inquiry-based learning activities,* a practice increasingly adopted in high schools. We believed that, despite our close age range, our differing perspectives could foster mutual learning and personal growth. This approach provided valuable insights for organizing *pre-study sessions* and *practical exchange meetings,* inspiring ideas for future projects and their management.
　Once again, this forum proved to be an invaluable experience, bringing together individuals from diverse generations and backgrounds across the country. Reflecting on the insights and lessons gained, I am motivated to leverage my strengths and put what I have learned into action moving forward.

2024 Newsletter

今年度の「食×ESD×ユネスコスクール」をテーマにした事前学習会・実践交流会での学びと、それらを各学校での活動にどう活かしていくのかについて、1枚のニューズレターにまとめ、3月初旬に提出しました。これは、単発的になりがちであった学習会・実践交流会をより長期的なものにし、一部の生徒だけでなく、学校全体に広げていくための一つの方策として提案されたものです。

事前学習会で様々な食の視点について学んだ生徒たちは、実践交流会でのワークショップ出展を展望し、それぞれの学校の特色や地域課題に寄り添い、どんな活動を進めてきたのか、実践交流会での学びを次にどう活かそうとしているのか、といった内容を盛り込んでいます。

This year's pre-learning and practical exchange meetings focused on the theme "Food × ESD × UNESCO Schools." The insights gained from these sessions and their application in each school's activities were summarized in a newsletter submitted in early March. This initiative aims to transform the often one-off learning and exchange meetings into more long-term and comprehensive engagements, extending the benefits beyond a select group of students to the entire school.

During the pre-learning sessions, students learned about various perspectives on food, preparing them for presenting workshops at the practical exchange meeting. The newsletter highlights how each school has tailored its activities to its unique characteristics and local issues. It also details how the lessons learned from the exchange meeting will be applied in future activities.

By documenting these activities and plans, the newsletter serves as a strategy to ensure that the knowledge and experiences gained are disseminated throughout the entire school, fostering a more comprehensive and long-term impact. This approach not only enhances the immediate effect of the meetings but also promotes ongoing learning and collaboration among students and teachers.

【掲載順】

1. 岡山県立和気閑谷高等学校 Okayama Prefectural Wakeshizutani SHS
2. 岡山学芸館高等学校 Okayama Gakugeikan High School
3. 岡山県立一宮高等学校 Okayama Prefectural Ichinomiya SHS
4. ノートルダム清心女子高等学校 Notre Dame Seishin Girl's High School
5. 岡山県立矢掛高等学校 Okayama Prefectural Yakage SHS
6. 美作高等学校 Mimasaka Senior High School
7. 岡山龍谷高等学校 Okayama Ryukoku High School
8. 岡山県立林野高等学校 Okayama Prefectural Hayashino SHS
9. おかやま山陽高等学校 Okayama Sanyo High School
10. 岡山後楽館高等学校 Okayama Korakukan High School
11. 朝日塾中等教育学校 Asahijuku Secondary School

和気閑谷高等学校 の「食」の取組

Wakeshizutani high school:reducing food waste, creating a sustainable future.

メンバー：南光稀 上西優太
假屋崎秀 高橋怜央 佐野成美
黒明和功 中務裕規

食問題にどう立ち向かう？

How do you confront food issues?

海ゴミひろい

TOYOTA SOCIAL FES!に参加！ゴミ拾いをした場所は鹿久居島フェスに参加してみて目に見えないところでゴミは増え続けていることが分かった。

実践交流会

よく売れ残る保存食材を使って料理を作った。作るにあたって売れ残る原因を考察し、誰でも食べやすいように食材の食感や味の工夫をした。当日も「家で作ってみたい」と好評だった。

今後に向けて

今後は、海洋問題の危機を知らせていくために自分たちで調べて、知らせていきたいと思う。そして、これから、料理をするときには食品ロスをなくすようにすべての食材を無駄なく工夫して作っていきたい。

岡山県立和気閑谷高等学校

フードバンクを通して、食品ロス解決と人々の健康維持を図る

岡山学芸館高等学校
社会福祉システムデザインゼミ

三世代交流会

三世代交流会では、岡山市平島地区の高齢者と子どもが120名集まり、異世代交流会を楽しむ。平島栄養委員会の方々が、フードバンクで提供してもらった食材を利用し、カレーを調理。

藤花ちゃん食堂

子ども食堂で調理する食材を、地域のスーパー、農家などからフードバンクで提供してもらい、子どもの健康に良い食事を提供する活動を定期的に実施。子ども食堂は、月1回開催。

【成果】

①フードバンクで、廃棄する食べ物が有効活用される。
②高齢者や子どもの健康の維持・促進を図れた。
③孤食がなくなり、皆で楽しく食事をすることができた。

【結論】

フードバンクの制度を活用することで、食品ロスをなくすだけでなく、人々の健康促進を促し、人々が楽しく食を楽しめる場を形成することができた。

“Food Banks: A Solution for Reducing Food Loss and Sustaining Public Wellness”

Okayama Gakugeikan High School

Seminar on Designing Social Welfare Systems

【the three-generation interaction event】

At this event, 120 elderly people and children from the Hirajima district of Okayama City gathered to enjoy an intergenerational interaction. The Hirajima Nutrition Committee members prepared curry using ingredients provided by the food bank.”

【Toka-chan Cafeteria】

We host an event called ’Kodomo Shokudo’ once a month, where we regularly provide healthy meals(diets) for children using ingredients donated through food banks from local supermarkets and farmers.”

【 Result 】

1. Thanks to the food bank, discarded food was effectively utilized
2. We succeeded in maintaining and promoting the health of elderly people and children
3. Everyone was able to enjoy meals together, which contributed to solving the social issue of ’koshoku’ (eating alone).

【 Conclusion 】

By making use of the food bank system, we have been able to not only reduce food waste but also promote people’s health and create a place where people can enjoy meals (eating) together.

今年度の取り組み

岡山一宮高校

2年生1人で活動しています。
今年は特に**食を大切にする**ことに力を入れています！

＜6月1日＞
サルベージパーティー

部員がそれぞれ、家で余った食材を持ち寄り、カレーを作りました。
今回使った食材は人参、玉ねぎ、じゃがいも、大豆ミート、米、カレールーです。

＜10月22日＞
エコイート訪問

一宮高校の近くにある、エコイート岡山北店に訪問し、店長さんにお店の活動などについてのお話を伺いました。

＜9月6~7日＞文化祭
シトラスリボンの製作

岡山一宮高校のユネスコ委員会と 協力し、シトラスリボンを約 200 個製作しました。
製作したリボンは文化祭に来てくれた人に配布し、とても好評でした！

Citrus Ribbon
PROJECT

さいごに

今後も企業訪問やイベント参加などを通して、フェアトレードをより多くの方へ広めていこうと思います。
また、SDGsに関して誰でもできることにフェアトレード商品の購入、食べれそうなら賞味期限が切れていても食べるなどがあります。
皆様もぜひ、できることから取り組んでみてください！

Seishin Girls' High School

Newsletter

March 3 2024

Supporting for refugees

UNIQULO×UNHCR "THE POWER OF CLOTHING PROJECT"

The reason why we chose this project is that our club's theme in 2024 was **refugees** and we were thinking about activities. Then our teachers suggested this project. First of all, we learned about refugees and poverty around the world. Also we cooperated with Kurashiki city and we worked on collecting clothes in many places. We noticed that even if we feel it is hard to wear those clothes anymore, we are able to make other people happy.

About Food loss

Common theme in 2024【food loss】

Food loss : The food which thrown away even it can be eaten

The amount of food loss in 2022 was 4.72 million tons per year

food loss (100%)

①50%: happen in business

②50%: happen in homely

Food loss × Supporting for refugees

Main activities

We started to think about food loss which are hidden in our daily lives and connected with the theme of refugees. Then, we asked a farmer in Hyogo Prefecture to donate us imperfect vegetables. In our school cultural festival, we presented them to people who donated clothes for refugees.

What we learned through the meetings in August and November

In the August, we learned about food loss and modern eating habits with university students and people from other schools. In addition, we also learned and acquired knowledge about the history of essential items such as microwave ovens and delivery services through a question form.

In the meetings which held in November, using what we learned in August, we made original board games related to food loss. Furthermore, we were also inspired by the activities of other schools' UNESCO clubs.

矢掛高校×食糧問題

矢掛高校HP　Instagram

メンバー

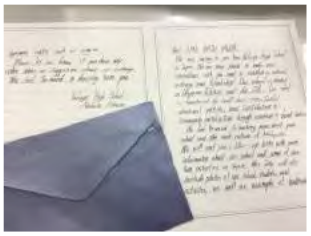
川上瑛太　木山ティナ　題府咲羽
中本結　藤枝舞　藤永さおり　三宅百香

実践交流会で学んだこと

他校の活動を聞き、新しい活動のあり方や、別視点の課題を知ることができてとても勉強になりました。
食糧問題を解決するための取り組みを幅広く学べたことはもちろん、他校と積極的に関わることの大切さを改めて学ぶことができ、私たちにとってとても貴重な経験になりました。

今後

矢掛高校は来年度、マレーシアのバトゥムダ高校と姉妹校協定を結ぶ予定です。
協定の締結に向けて、岡山大学の学生にマレーシアの文化について教えていただく座談会が設けられました。そして参加した生徒がバトゥムダ高校宛に手紙を送りました。



座談会では日本とマレーシアの「食」の話で盛り上がりました。姉妹校協定が締結されたら、まずは「食」に関する文化交流から始めたいです。

取り組み

○雲の上カフェ

高校生が主催。
山ノ上地区にある公会堂を借りて、12月22日に干し柿や地元の食材を使った料理を販売しました。

○とれたてローカルフードいただきます

2月15日、岡山県内の小規模高校とコノヒトカンで繋がり、自分たちの手で学校を守るイベントを行いました。来年度には合宿を行う予定です。

○高校生「夢育」PBLフォーラム

実践交流会のワークショップで行ったカードゲームを紹介するポスターを作成し、発表しました。さらに多くの人に「食」のゲームを知ってもらう機会になりました。

Yakage High School

Food Problem

HP　Instagram

member

Kawakami Eita, Kiyama Tina, Daifu Sakiha,
Nakamoto Yui, Fujieda Mai, Fujinaga Saori, Miyake Momoka

What we learned

We were able to listen to the activities of other schools and learn about new activities and issues from a different perspective.

We were able to learn a wide range of initiatives to solve the food problem. We also learned again the importance of engaging with other schools actively, and it was a very valuable experience for us.

Future activities

Yakage High School plans to establish a sister school relationship with BATU MUDA High School in Malaysia next academic year. Accordingly, we held a roundtable discussion about malaysian culture with Okayama University students. Afterwards, the participating students sent a letter to BATU MUDA high school.

At the roundtable discussion, we had a lively conversation about food between Japan and Malaysia. When we have a sister school relationship, I would like to start with cultural exchanges related to food.

Initiatives

○"Kumonoue Cafe"

Hosted by high school students.
We rented a public hall in the Yamanoue area.
On December 22, we sold dishes using dried persimmons and local ingredients.

○We have freshly picked local food

On February 15,we connected with other small high schools in Okayama Prefecture through Konohitokan . We also held an event to protect the school with our own hands. We are planning to hold a training camp next year.

○High school students' "Yumeiku" PBL Forum

We announced the card game introduced at the practical exchange meeting on this forum. We hope more people have learnt about the game of "food".

学校法人美作学園

岡山県美作高等学校

MIMASAKA Senior High School

事前学習会・実践交流会まとめ

岡山県美作高等学校
2年　松原柚姫，松尾春花，澤野琴音，橋本周，
横部恋，氏平圭，原大貴，後藤拓磨
1年　斎藤琳太郎，坂手 智勇，細川 詩太

◎事前学習会・実践交流会を通して学べたこと

〈事前学習会〉

事前交流会では貧困とフードロスについて他校の生徒がランダムに班を組み話し合いました。
学べたことは
→世界によって食べ物問題は異なる
→世界的貧困の現状についてです。

〈実践交流会〉

実践交流会では各高校が行ってきたボランティアや活動を資料にまとめて共有しました。
私たちの高校は売るのに必要な条件を満たせなかったぶどうを使っての染物や捨ててしまう卵の殻を使ってキーホルダーを作る体験型でフードロスについて学びを深めました。
学べたことは
→高校生でもできることが沢山ある
→身近なものがフードロス対策になる
です。

◎これからの取り組み

〈フードロスに関連する取り組み〉

～自分たちにできること～

・食べ残しをしない
・食べれるところは工夫して全て食べる
　(捨てれるばしょを減らす)
・賞味期限が近いものから食べる

～そのためにできること～

・食べ残しをしないことを心がける
・普段捨てる部分が食べれるか調べてみる

◎これからの取り組み

〈フードロスに関連する取り組み〉

～高校や全体でできること～

・フードロス関連のボランティアに参加する
・仲間や友達とフードロスについての情報を共有する
・SDGsについて授業なども活用して考えを各々深める機会をつくる

英語ユネスコ部の
Instagram はこちら!

@MIMASAKA.UNESCO

美作高校の HP・
Instagram はこちら!

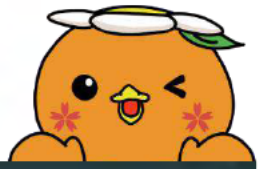
美作高校HP

MIMASAKA.HIGH.SCHOOL
Instagram

学校法人美作学園

岡山県美作高等学校

MIMASAKA Senior High School



◎ Future initiatives

<Efforts related to food loss>
~What we can do~
·Leave no food left over
·Eat everything as far as one can with ingenuity
(Reduce the amount of wastewater)
·Eat food that are closest to the expiration date first

~What can be done for that purpose~
·Try not to leave anything left over
·We'll see if we can eat what I usually throw away.

◎Learning through pre-learning sessions and practical exchange meetings

<Pre-study session>
At the pre-exchange meeting, students from other schools formed a team to discuss poverty and food loss . What we learned was
→ Food problems vary from world to world
→This is about the current state of global poverty.

<Practical exchange meeting>
At the hands-on exchange meeting, we shared the volunteers activities that each high school has done.
Our high school has deepened learning about food loss by making key rings using grapes that fail to meet the requirements for selling and eggshells that are thrown away.
What we learned was
→There are many things that even high school students can do
→Familiar things can be used as countermeasures against food loss

◎ Future initiatives

<Efforts related to food loss>
~What we can do~
·Leave no food left over
·Eat everything as far as one can with ingenuity
(Reduce the amount of wastewater)
·Eat food that are closest to the expiration date first

~What can be done for that purpose~
·Try not to leave anything left over
·We'll see if we can eat what I usually throw away.

◎ Future initiatives

<Efforts related to Food loss>

~We can do them in high school~
·participate in food loss-related volunteers
·share information about food loss with friends and friends
·Create opportunities to deepen your thoughts on SDGs by utilizing classes and other methods

Instagram
of our club.

Website ·Instagram
of mimasaka senior
high school.

@MIMASAKA.UNESCO

美作高校HP

MIMASAKA.HIGH.SCHOOL
Instagram

学校ホームページ

ユネスコスクールの取り組みを通して

岡山龍谷高校 大塚、佐藤、中藤、古谷

活動内容

学校の探究活動で瀬戸内海の漁業について興味を持ち活動を行っている。岡山水産研究所や笠岡道の駅に行き、漁業の第一線で活躍している方のお話を聞きいた。この経験をふまえ私達は魚介類の魅力が消費者に伝わっておらずそのため魚の漁獲量、消費量ともに減少しているのではないかと考え、それを課題とした。この課題について関西学院大学で開催された関学リサーチで発表を行った。そしてこの問題解決のために「おさかなかるた」を開発し実践交流会のワークショップでも披露した。「おさかなかるた」は現在も随時改良を続けている。

事前交流会を通して

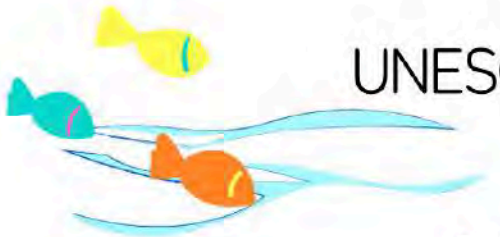
意見交換を通じて、同年代の食に対する意識を知ることができた。特に未来の食卓を考える活動を通じて、環境と食には強い結び付きがあることがわかった。食文化を守り、未来に繋いでいくために私達の一つ一つの行動が重要だとわかった。将来の食についての多くの意見に刺激を受け、郷土料理や特産品を守り続けることの大切さや私たち若い世代ができることを考える良い機会になったと思う。

実践交流会を通して

数時間の他校との発表交流会の中で、発表の準備中には見つけることができなかった意見がたくさんあった。例えば発表の内容。私たちは「消費量を増やす」ことに重きを置いていたが、他校の内容は「廃棄量を減らす」ことを中心に考えているものが多く、体験を通して廃棄される食品の活用方法を広める方向でまとめられていた。他校の生徒から寄せられたコメントを読むと、私たちの発表の目標である「かるたを通じて魚に関心を持ってもらおう」は達成されたと言えるだろう。

今度の活動方針

魚をたくさん食べてその美味しさを知ってもらうには、第一に魚に興味を持ってもらうことが重要だと考えている。今回制作した『お魚かるた』を十分に活用して、まずは地域の子どもたちへ、子どもたちから家族へ…というふうに魚への興味の輪を広げていこうと思う。



UNESCO ACTIVITY

OUR SCHOOL IQR

OKAYAMA RYUKOKU HIGH SCHOOL

written byOtsuka Sato Nakatomi Hurutani

OUR ACTIVITIES

As a part of our school expedition, we have been interested in the fishing industry in the Seto Island Sea and have been working on exploration activities about it. We visited the Okayama Prefectural Fisheries Experiment Station and Michi-no-Eki Kasaoka to talk with people who work at the front line of the fishing industry. Based on this experience, we thought that the appeal of seafood was not being conveyed to consumers, and that this was the reason for the decline in both catch and consumption.We also gave a presentation on this issue at the Kwansei Gakuin Research Conference at Kwansei Gakuin University.
In order to solve this problem, we developed "Osakana Karuta" and presented it at the practical exchange meeting.Note that "Osakana Karuta" is still being improved.

TRHOUGH THE PREMEETING

Through the exchange of opinions, we were able to learn about the food awareness of our age group.In particular, through our activities to think about the future of food, we have learned that there is a strong link between the environment and food. We have learnt that each of our actions is important in order to protect our food culture and connect it to the future.The many opinions about food in the future stimulated me and gave me a good opportunity to think about the importance of keeping local cuisine and specialities alive and what we, the younger generation, can do to help.

THROUGH THE MEETING

During the several hours of presentation exchanges with other schools, there were many opinions that could not be found in our presentation such as, the content of the presentations. We had focused on 'increasing consumption', but other students focused on "reducing waste" and were organised in the direction of promoting the use of food that would otherwise be discarded through hands-on experience.Based on the comments we received, we can say that we achieved the aim of our presentation, which was to 'get people interested in fish through karuta'.

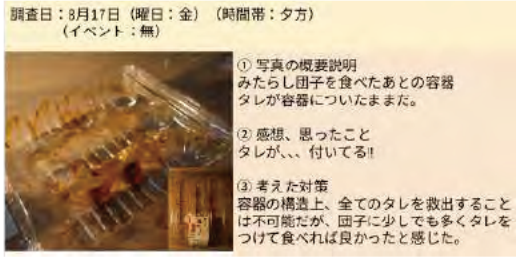
FUTURE ACTIVITIES

We believe that in order for people to eat a lot of fish and have people know how delicious it is, it is first and foremost important to get people interested in fish. We will make full use of the "Osakana Karuta" we produced this time to expand the circle of interest in fish, first to local children, then from children to their families...and so on.

The Importance of Consideration Learned from Games in Evacuation Shelters

Hayashino High School gave a presentation on food loss and held a workshop called Children's Diner Chef to learn about the difficulties of cooking with limited and little food.
Posters were presented on the food drive and Operation Food Loss Reduction actually conducted at Hayashino High School, as well as on Konohitokan.
The poster session at the other schools provided us with new perspectives and valuable information about the activities of companies, etc., which were different from our own presentations.
In the workshop called Children's Cafeteria Chef, the participants made scored dishes to reduce food loss as much as possible with cards of food that is about to be disposed of. The idea is to reduce the loss as much as possible by changing the cards with different handles. Through the game, participants realise that they can make such dishes with such ingredients! At the same time, the participants were able to realise that it is difficult to make limited recipes with limited ingredients. In the future, I would like to actually cook delicious dishes using surplus ingredients at home.

Promoting activities of High School in Okayama to the World



On a certain day, we organised a food drive at Hayashino High School. This was done with the help of students from a nearby university. However, despite making posters and calling for food in class, we were unable to collect any food at all, but only a few teachers cooperated. We realised that we did not advertise enough and did not deliver the meaning of our activities to many people.
During the summer holidays, we held Operation Food Loss Reduction. UNESCO members conducted a survey on food loss around us to get hints for our activity policy. An overview of the food loss from each household, their impressions and measures to eliminate it were compiled into one slide and shared at the end of the summer holiday. Through this activity, we realised that food loss is more familiar to us than we imagined, but also that we do not have much food loss among us and that with a little awareness we can completely eliminate food loss at home.

Our next activity

By having many people participate in the “Children's Diner Chef” game, which was held during the practical exchange meeting, and by having them learn through the game that food loss can be reduced, I hope that each and every one of them will be able to work on reducing food loss, and not just think of it as someone else's problem. Furthermore, we want to increase the number of people who can take action, knowing that a little effort can save the world, as even a small amount of food loss can accumulate and lead to global warming and other global problems.

私たちにできるSDGs

おかやま山陽高等学校　ユネスコ部

食×ESD×ユネスコスクール

コアメンバー会議を通して、皆さんの活動を繋げることができるのが食であると感じ、今回のユネスコスクールのテーマを「食×ESD×ユネスコスクール」に決定した。

岡山県ユネスコスクール高等学校 ネットワーク協議会　事前学習会

昨年8月、事前学習会に参加した。
発表の準備をする中で、今年のテーマである「食×ESD×ユネスコスクール」を参加者全員に理解してもらうためには、分かりやすい例を用いることが大切だと学んだ。

また、大学生による未来の食卓を考えるワークショップでは、今の食事を未来に残すには私たちが食に対して今よりももっと深く考えるべきだと感じた。

岡山県ユネスコスクール高等学校 ネットワーク協議会　実践交流会

昨年11月、実践交流会に参加した。本校は幹事校として事前学習会の反省を生かし、参加者の方々全員と交流ができるように時間配分などを工夫した。

この交流会では、ポスターセッションやワークショップを行い、言葉だけでなく体験してもらうことで多くの人に社会問題やSDGsを自分ごととして捉えてもらうことが大切だと気づいた。

みんなのあい・かもフェスタ@鴨方東小学校

今年1月、小学校の学習発表会に授業ボランティアとして参加した。
食べ残しを減らす大切さを伝えるためのオリジナル紙芝居の発表等を行った。紙芝居への反響や小学生の考えた取り組みから、小学生との関わり方を学ぶことができた。そして、この学びを小学生向けの出前授業などの活動に活かしていきたい。

小学生向け学習教材制作

今年1月、一般社団法人から『コノヒトカン』を題材とした小学生向けの探究学習教材の依頼を受けた。
教材作りを通して、授業では知識を教えるのではなく、児童に考えてもらうことが重要ということに気づき、分かりやすく伝えるための言葉選びや授業の構成を工夫した。また、その中で答えのない問いについて考える「探究」の難しさを改めて感じた。

ユネスコスクールから学んだこと

今後は、いろんな視点から物事をみて、一つのことにとらわれず新しい意見が出せるような活動をしていきたい 。また、SDGsの1番「貧困をなくそう」、2番「飢餓をゼロに」の解決を目指して、解決すべき問題同士の繋がりを感じながら多方面の視点からの考え方を持つことを大切にしていきたい。特に教材作りでは、小学生の未来に役立つ「探究」になるように心がけて完成させたい。そして、SDGs解決を目指して様々な方面からアプローチをしていきたい。

SDGs that we can do

Okayama Sanyo high school
UNESCO club

Food problem × ESD × UNESCO

Through the core member meeting, we felt that food was the best way to connect our activities and decided on "Food x ESD x UNESCO School" as the theme for this year's UNESCO School.

Okayama Prefecture High School Network Council for UNESCO Schools Preliminary Study Meeting

We participated in the Preliminary Study Meeting last August. In Preparing for the event as the organizing school, we learned that it is important to use easy-to-understand examples in order for all participants to understand the theme of the event, "Food ×EDS×UNESCOSchool".

In the workshop Conducted by university students,we were able to gain new perspectives on how food is connected to Various issues.

Okayama Prefecture High School Network Council for UNESCO Schools Meeting

Last November,we attended a Meeting. As the organizing school,we made the most of the lessons learned from the Preliminary Study Meeting to devise a time allocation that would allow us to interact with all the participants. Through this Meeting,we learned That it is important not only to communicate in words,but also to have people actually experience it in order for them to see it as their own personal business.

MINNANOAI・KAMOFES @Kamogatahigashi Elementary School

In January this year, we participated in an elementary school's study presentation as a classroom volunteer. We presented an original picture-story show to convey the importance of reducing leftover food. The response to the picture-story show and the efforts of the elementary school students taught me how to relate to elementary school students. We would like to make use of this learning in our activities such as delivery classes for elementary school students.

Production of learning materials for elementary school students

Through the creation of teaching materials, we realized that it is important to have students think rather than teach knowledge in class, and we tried to choose words and structure the class to make it easier to understand. From this part of the process, we learned the difficulty of making students think about things for which there are no answers, and of "exploration".

What we have learned from UNESCO School

In the future, we would like to be able to look at things from a variety of perspectives, and to be able to formulate new opinions without being limited to a single issue. In addition, we would like to emphasize the importance of thinking from multiple perspectives while feeling the connections between problems that need to be solved in order to solve SDGs No.1:eliminate poverty and No.2:reduce hunger to zero. In particular, we would like to complete our teaching materials by making sure that they are useful "explorations" for the future of elementary school students.We would also like to continue to approach the SDGs from a variety of perspectives in the future.

岡山市立岡山後楽館高等学校

2年：今田 華暖（制作者）、蜂谷 京都子（翻訳者）、岡﨑 蒼依、三村 明希、河本 雄太、美崎 匠哉、西山 慶信、吉田 琥太郎
1年：浮田 紗和、名和 葵、宮口 颯陽花、岡山 芽生、藤原 直也、廣川 大和、森永 琉太、大川 乃楓

食 × ESD × ユネスコスクール

《8月23日 事前学習会で学んだこと》

◇地産地消の実践

ワークショップを通じて地産地消の献立作りを体験し、地域の食材を大切にする意識が高まった。

◇フードロスと未来の食文化

フードロスの基本的な知識を学び、食料を無駄にしない意識がより高まった。また、気候変動やプラスチック問題が食文化に与える影響を知り、SDGsへの関心が深まった。

◇他者との交流による学び

未来の食卓を考えるワークショップを通じて、世界と日本の食文化の違いを学び、多様な価値観に触れる貴重な機会となった。

食の問題を見つめ直し、持続可能な行動の必要性を再認識する機会となった。

《11月17日 実践交流会で学んだこと》

◇ワークショップの体験

私たちは「解き明かそう！岡山県版気候変動のミステリー！」というテーマでカードを使ったワークショップを行った。自校とは異なる実践的なワークショップ（試食や工作など）を体験し、新鮮で楽しく学べる内容に魅力を感じた。また、私たちのディスカッション中心の活動と比較し、手軽に学べる方法の良さにも気づいた。

◇フードロスや資源活用についての学び

フードロス削減のために、食材を無駄なく使う工夫や、普段捨てられてしまう資源の活用方法を学んだ。実際にフードロスを活用した料理（シチュー、金柑の調理法）や、ぶどうの皮での染色体験などを通じて、新たな知識を得た。

◇社会全体と個人の取り組み

食材をできるだけ無駄にしないなどの個人の工夫と、プロジェクト活動など社会全体で進める取り組みの両方が重要であると感じた。

◇他校との交流を通じた気づき

知らなかった分野について学ぶことができ、質疑応答を通じて、実際に行動している学校の取り組みに刺激を受けた。また、自校の活動を振り返り、「課題解決に向けた具体的な取り組みが必要である」と考えるようになった。

食に関する課題を深く考え、具体的な行動がもたらす影響を理解する貴重な経験となった。

《フードロスに関する取り組み》

◇ 学校の取り組み

→ 各学校でのフードロス削減の取り組みを共有し、より効果的な方法を学ぶ。
→ 文化祭などのイベントを活用し、不要な食材を回収する活動を実施する。
→ フードドライブの開催を検討し、学校内で食品寄付を推進する。

◇ 企業や社会との連携

→ 企業と連携し、食品ロス対策の取り組みを学ぶ機会を増やす。
→ フードバンクの活用を促進し、消費期限が近い食品を子ども食堂などに寄付する。
→ 日本国内だけでなく、海外の飲食店とも協力し、フードロス削減への意識を広める。

◇ 個人や家庭でできること

→ 食品購入時に、必要な量や消費期限を意識して無駄を減らす。
→ 食品ロスになりそうな食材を活用したアレンジ料理を実践する。
→ 食べ残しを減らし、寄付やボランティア活動に積極的に参加する。

◇ フードロス啓発活動

→ フードロスに関する情報を友人や周囲に発信し、意識を高める。
→ 学校の食堂の入口やトレー置き場に「食べ残しを減らそう」のポスターを掲示する。
→ ゲーム形式（かるたやトランプ）を取り入れ、楽しくフードロス問題を学ぶ機会を提供する。

学校、社会、家庭のそれぞれでフードロスを減らす意識を高め、具体的な行動につなげていくことを目指す。

Okayama Korakukan High School

11th Grade : Kanon Imada, Kotoko Hachiya, Aoi Okazaki, Aki Mimura, Yuta Kawamoto, Takuya Misaki, Yoshinobu Nishiyama, Kotaro Yoshida
10th Grade : Sawa Ukita, Aoi Nawa, Soyoka Miyaguchi, Mei Okayama, Naoya Fujiwara, Yamato Hirokawa, Ryuta Morinaga, Nonoka Okawa

Food × ESD × UNESCO School

《August 23:What we learned at the pre-studymeeting》

◇ Practicing local production for local consumption

→ The experience of preparing menus for local production for local consumption increased awareness of the importance of local ingredients.

◇ Food loss and future food culture

→ Learned basic knowledge of food loss and improved awareness of the importance of not wasting food.

◇ Learning by interacting with others

→ The workshop was a good opportunity to learn about the differences in food culture between Japan and the rest of the world and to learn about diverse values through a workshop that focused on the dining table of the future.

We had a great opportunity to think about issues related to food and became more aware of sustainable behaviors.

《November 17:What we learned at the practical meeting》

◇ Experience workshopsat other schools

→ Experiencing practical workshops (related to tasting, crafts, etc.) that were different and unique. Students found the learning experience to be fun.

→ We learned many things through experiencing different discussion-based workshops.

◇ Learning about food lossand resource use

→ To reduce food loss, the participants learned how to use food without wasting and how to utilize resources that are usually thrown away.

→ Through actual cooking using food loss (for example, cooking kumquats) and hands-on experience dyeing with grape skins, the participants gained much new knowledge on how to contribute to food loss reduction.

◇ Societal and individual efforts

→ We felt that both individual efforts (to avoid wasting food as much as possible) and efforts promoted by society as a whole (project activities, etc.) are important.

◇ Awareness through interaction with other schools

→ We were able to learn about areas we did not know about.

→ Through the Q&A session, we were inspired by the efforts of schools that are actually taking action and steps in moving forward.

→ Reflecting on the activities of our school, we began to think an initiative to solve something was needed.

It was a great opportunity to think more deeply about food-related issues and learn the importance of taking action.

《Initiatives Related to Food Loss》

◇ Schools ideas for initiatives

→ Learn effective ways to reduce food loss by sharing each school's food loss reduction efforts.

→ Utilize main events such as cultural festivals to conduct activities to collect unwanted food.

→ Consider holding food drive events and organizing food donation drives at schools.

◇ Collaboration with businessesand society

→ Increase opportunities to connect with companies and learn about their food loss prevention efforts.

→ Promote the use of food banks and donate food items nearing their expiration date to kids' cafeteria.

→ Cooperate with restaurants not only in Japan but also around the world to spread awareness of food loss reduction.

◇ What individuals and families can do

→ Be aware of quantity and expiration dates when purchasing food to reduce waste.

→ Practice cooking that utilizes ingredients that are often thrown away as waste.

→ Reduce leftovers and actively participate in donation and volunteer activities.

◇ Food loss awareness activities

→ Spread information about food loss to friends and surroundings.

→ Display signs written "Reduce Leftovers" at school cafeteria entrances and tray storage areas.

→ Create opportunities to learn about food loss issues in a fun way by incorporating games (for example, *Karuta* and other card games).

We aim to raise awareness of food loss reduction at school, in society, and at home, and to use this as an opportunity to start making concrete action.

朝日塾中等教育学校
ユネスコスクール
NEWSLETTER

参加者：　赤塚愛莉　一石実優　岡本祥希　佐々木水明　杨嘉彤

2025年3月

ユネスコスクールに参加して

事前学習会で世界や日本で起きている食品ロスについて聞き、これから私たちがどのように行動していくべきなのか自分たちで考えることが出来ました。

事前学習会で私たちは規格外野菜に着目しました。また私たちの学校の周りの野菜の直売所を訪れ、その規格外野菜の現状についてヒアリングしました。それを踏まえ少し形が歪な野菜を、どのようにすれば活かすことができるのかをポスターセッション、ワークショップで伝えました。

参加後の活動

第一回「カンカン料理大会」を開催することができました。実行委員も大会に参加し、参加者全員で楽しみながら料理をすることが出来ました。

↑当日の様子

今後の予定

地域活性化の為にイベントを企画し、「ごみゼロ」を実施しています！

①音楽と青空市（5月開催）
- ポイ捨てゼロを目指すためにゴミ箱を設置しない
- 企画運営は高校生中心
- 自分たちで宣伝して、たくさんのキッチンカーやステージ出演者が来場予定

②獅子舞フェスタ（11月開催）
- 地域の規格外野菜を使った新しい商品開発
- 自分たちで宣伝して、たくさんのキッチンカーやステージ出演者が来場予定

編集　岡本祥希

朝日塾中等教育学校

〒709-2136 岡山市北区御津紙工2590

TEL：086-726-0111 / FAX：086-726-0400

サイト：https://m-asahijuku.ed.jp/

Asahijuku Secondary School

UNESCO SCHOOL NEWSLETTER

March 2025

Participants: Airi Akatsuka・Miyu Ichiishi・Yoshiki Okamoto・Suimei Sasaki・Kato You

What we learned from attending to UNESCO school events

In the pre-learning session, we learned about food waste both globally and in Japan, and had the opportunity to reflect on how we should act in the future.
During the pre-study session, we focused on substandard vegetables. We also visited a vegetable market near our school, where we learned about the current situation regarding these vegetables. Based on this, we discussed ways to make the most of slightly misshapen vegetables through poster sessions and workshops.

Activities after attending to UNESCO school events

The first ‘Kankan Cooking Competition’ was organised. Executive committee members also took part in the competition, and all participants enjoyed cooking together.

↑The day of the event

Upcoming events

We plan events to revitalize the region and promote "zero waste"!

① “Ongaku to Aozoraichi” (held in May)
・No trash cans will be provided in order to encourage zero littering.
・Planning and management will be led by high school students.
・We will promote the event ourselves, with many food trucks and stage performers joining us.
② “Shishimai festival” (held in November)
・New products will be developed using local substandard vegetables.
・We will promote the event ourselves, with many food trucks and stage performers joining us.

Translated by Miyu Ichiishi

Asahijuku Secondary School
2590 Mitsu Shitori, Kita-ku, Okayama 709-2136
TEL：086-726-0111 / FAX：086-726-0400
https://m-asahijuku.ed.jp/

マレーシア研修報告

柴川　弘子　（岡山大学ESD協働推進センター）

『ESD教師教育に向けた実践共同体を形成促進する多元的学習モデルの開発』

2024年8月10日～17日 兼田・三宅先生参加は10～14日参加
於：マレーシア・クアラルンプール
協力：国際イスラミック大学マレーシア　Irina S. Zen 助教
国立バトゥムダ高校(SMKBM)
クアラルンプールインドネシア人学校(SIKL)

今年度も標題の研究課題に基づいて、ネットワークの先生と共にマレーシアでの研修会を実施しました。本報告書では参加された2名の先生方から報告を寄稿して頂き、ネットワークの先生方と経験を共有したいと思います。各学校およびネットワーク全体の活動の発展に寄与できればと考えています。

研修の目的

現代社会の喫緊の課題である「ESDの推進を担う教師の育成」の鍵として、彼ら自身の実践共同体を形成促進していくことが挙げられる。本研修は、異なる背景や動機を持つESD（担当）教員が共に国外における教育の状況やESDの多様な実践を経験し、自らの国・現場の教育を新たな視点で見つめ直し、共に協議し、文化の異なる国の教育者らと親睦を深めることにより、涵養された新たな視点が学習プログラムの開発に還元されることを期待する。

研修内容

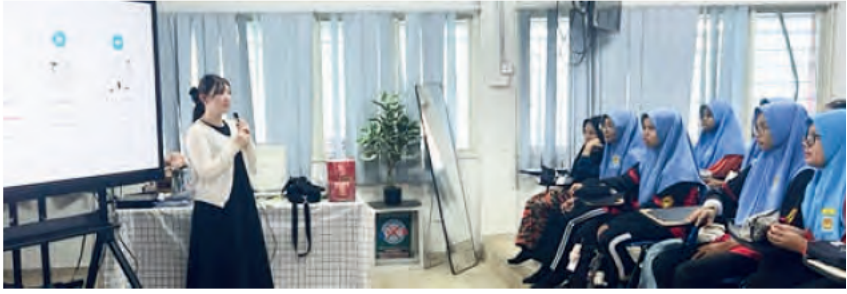
渡航までにミーティングを行い、目的や内容について確認を行った。柴川の共同研究者であり、岡山のESDの研究実績もある国際イスラミック大学マレーシアのイリナ・ゼン助教と相談の上、昨年度も訪問した国立バトゥムダ高校とKLインドネシア人学校を訪問することや、現地コミュニティで先進的なサステナビリティの実践を行うコミュニティ・ガーデンやギャラリー、ミュージアムや川の保護団体等を訪問することになった。特に学校訪問では、前年度の経験から、日本の高校生に興味関心が高い生徒も多いため、先方の希望により、日本人教員が自校のESDの取り組みをプレゼンテーションすることになった。

結果

結果として両校で生徒の異文化理解やESDへの関心・意欲を高める契機となった。また、姉妹校縁組などの案も出て、継続的な交流へと発展できるように両国が動き始めたこと、交流できるグループが形成されたことはひとつの成果である。参加した先生方の振り返りからも、この経験が各校での探究活動等に還元されていると分かる。

From August 10-17, 2024, a training program was held in Kuala Lumpur, Malaysia, focusing on developing a pluralistic learning model to promote ESD teacher education. The program, in collaboration with the International Islamic University Malaysia, National Batu Muda High School, and Kuala Lumpur Indonesian School, aimed to foster communities of practice among ESD teachers. Teachers from diverse backgrounds experienced various educational practices and ESD implementations abroad, reflecting on their own contexts with new perspectives. They engaged in discussions and built relationships with educators from different cultures, enriching their viewpoints and contributing to learning program development. Visits included National Batu Muda High School, Kuala Lumpur Indonesian School, community gardens, galleries, museums, and river conservation organizations. Japanese teachers presented their ESD initiatives, sparking interest among students. The program enhanced students' intercultural understanding and interest in ESD. Proposals for sister school partnerships emerged, and efforts began to develop ongoing exchanges. Reflections from participating teachers indicated that the experience was being integrated into inquiry activities at their respective schools.

『ESD教師教育に向けた実践共同体を形成促進する多元的学習モデルの開発』のための教員研修を経て



ノートルダム清心学園
清心中学校・清心女子高等学校 英語科
兼田 紗綺

1. 研修背景
ユネスコスクール校出身者として様々な場で運営等に携わり、大学院卒業後はユネスコスクール指定校に英語科教員として勤務し、授業内でのESD実践やユネスコ部の運営を通して、生徒らにESDの価値観等を教えてしている。

2. 2023年度教員研修
様々な機関を訪問させていただき、それぞれ意見交換や情報共有を行なったが、現地高校(国立バトゥムダ高校、SEKOLAH INDONESIA KUALA LUMPUR)のカリキュラムに関心を抱いた。それと同時に各校で展開されている特色ある授業を、どのような形であれば自校に取り入れられるかを検討する契機となった。特に国立バトゥムダ高校ではインクルーシブ教育が活発に行われており、発達の特性を持っている生徒の個性を尊重するカリキュラムが組まれていたことに感銘を受けた。個々人の尊重と個性の伸長を目標とした教育開発は、日本の学校教育でも大切にされているものの、実際には教科指導や生活指導に注力されていることがほとんどである。日本の教育体制も重んじながら、柔軟な視点や授業を展開していく必要があると感じた。

3. 2024年度教員研修
2023年度同様の2校を訪問したため内容を深め、具体的に本校生徒がどのような実践(探究)を行なっているか例を挙げながら発表した。日本ならではの物(竹など)を使って行なっている研究には、とりわけ関心を持ってくれた。自国との比較をしながら伝えることで、生徒らもイメージが湧きやすく、「これならできるんじゃないか」とPBLの可能性を生徒ら自ら広げていた印象を受けた。
その他にも、生徒の積極的で前向きな姿勢には感心した。私の約15分程度の発表に対し、40分を超える質疑応答を受けたからだ。生徒らは自分なりに内容を理解し、その上で上手く伝えられない部分がありながらも一生懸命に英語で質問をしようとしていたり、さらに級友が語学的な部分をフォローしたりしている姿が、刺激を与え合い高め合っているのだと感じた。

またクアラルンプールにはビルが立ち並ぶ都会の中に、「公民館」のような役割をしている施設があったり、様々な風刺を通して歴史や社会学を考えさせられるような美術館があったり、地域の人々が交流/表現できる場が設けられていることを初めて知った。一方で私立学校である本校は、公立校とは異なり地域色が薄いように感じている。これまで「地域」というワードに悩むこともあったが、地域連携の形は生徒や授業を通してだけではなく、公共施設を活用することもできるのだと学ぶことができた。

4. 新たなプログラム開発
本校の強みであるPBLを基盤とする探究や日々の学びを活かし、現地高校との交流を計画している。生徒らが対話的かつ、主体的に学ぶことのできる教育プログラム開発に努めていきたい。本校の探究活動は後輩がテーマを引き継ぐことも多いため、彼女らが自分たちの探究をより深めるための契機にもなるのではないかと考えている。また互いに自然な流れで国際交流もできるため、ツールとしての英語を学んだり、コミュニケーション能力の育成に繋がったりすると期している。PBLを基とする共同研究等が実現すれば、生徒同士の輪が広がるだけでなく、教員同士の輪も広がり、指導方法含め双方の教職員にとっても学び多い「輪」になることができると考える。

5. 自身の変化
私は常どこか他人行儀な関わりをしている生徒が、自分の高校生時代を振り返ってもあまりに多いことに引っかかりを感じるようになっていた。これはコロナ禍でコミュニケーションを取ることを断たれていたからではないか、と考えられる。2年間の研修で多くの現地の生徒らが主体的かつ楽しそうに活動をしている姿を幾度となく目の当たりにした。そこから学んだことは、「生徒らが安心して殻を破り、自分らしさを発揮することのできる環境や雰囲気づくりが私たち教員に求められている」ということだ。生徒の個性を尊重しつつ、それを活かした声かけや指示を日常や授業に取り入れたいと強く思う。授業等のためだけでなく、教員としての資質を再考する良い契機になった。

6. 謝辞
末筆になりましたが、本研修を企画実施してくださった岡山大学の柴川弘子先生、連携してくださった国際イスラミック大学マレーシア、国立バトゥムダ高校、SIKL等複数機関の皆様、科学研究費助成事業として支援をしてくださった文部科学省並びに日本学術振興会のすべての皆様に心より御礼申し上げます。

Teacher Training for the Development of a Multidimensional Learning Model to Promote the Formation of a Community of Practice in ESD Teacher Education

Notre Dame Seishin Gakuen, Seishin Gakuen Junior/Senior High School, English Department
Saki Kaneda

1. Training Background

As a graduate of a UNESCO Associated School, I have participated in various operational activities. After completing my postgraduate studies, I became an English teacher at a UNESCO-designated school, where I teach ESD values through classroom ESD practices and manage the school's UNESCO Club.

2. 2023 Teacher Training

During the training, we visited various institutions, engaging in discussions and sharing information. Among these experiences, I found the curricula of local schools (National SMK Batu Muda and Sekolah Indonesia Kuala Lumpur) particularly intriguing. The visit also provided an opportunity to reflect on how the unique teaching approaches implemented at these schools could be adapted to our own institution. At National SMK Batu Muda, I was especially impressed by the school's strong emphasis on inclusive education, with a curriculum carefully designed to respect and nurture the individuality of students with diverse developmental characteristics. While educational development that respects individuals and personal growth is also emphasised in Japanese schools, in practice, the focus is often placed on subject instruction and student guidance. While maintaining the strengths of Japan's educational system, I felt the need to incorporate more flexible perspectives and teaching approaches.

3. 2024 Teacher training

As in 2023, we visited the same two schools, allowing for a deeper exploration of the topics discussed. During the visit, I gave a presentation showcasing specific examples of the inquiry-based projects undertaken by our students. The students were particularly interested in research involving uniquely Japanese materials, such as bamboo. Comparing these studies with their own country's context helped them visualise the concepts more clearly. I got the impression they were actively exploring the possibilities of project-based learning (PBL), thinking, 'We could try this ourselves'.

I was also deeply impressed by the students' proactive and positive approach. Although my presentation lasted only about 15 minutes, the Q&A session went on for over 40 minutes. The students made an effort to understand the content in their own way, and despite struggling to express themselves clearly, tried their best to ask questions in English. Watching their classmates support them with language made me feel that they were inspiring and improving each other through these interactions.

I was surprised to learn for the first time that, despite Kuala Lumpur being a metropolis lined with skyscrapers, there are facilities that serve a role similar to community centres, museums that use satire to provoke thought on history and sociology, and spaces where local residents can interact and express themselves. Contrarily, as a private school, our institution seems to have weaker ties to the local community compared to public schools. In the past, I often struggled with the concept of 'community', but I realised that regional collaboration is not limited to students and classroom activities—it can also be achieved through the use of public facilities.

4. Development of a New Programme

We are planning an exchange programme with local Malaysian high schools, building on our school's strengths in PBL and inquiry-based learning. We aim to develop an educational programme that will allow students to engage in interactive and independent learning. Since the topics for our school's inquiry-based projects are often passed down to younger students, we believe this initiative will also serve as an opportunity for Malaysian students to deepen their research. Additionally, by fostering a natural flow of international exchange, we hope that students will develop their English skills as a communication tool and enhance their ability to interact effectively. If collaborative research based on PBL becomes a reality, it will expand the circle of connections not only among students but also among teachers. We believe it can foster a valuable network of learning for faculty members, including insights into teaching methods.

5. Personal Growth

I began to feel a growing sense of unease about the number of students who seem to maintain a certain emotional distance in their interactions—something I realised was also common during my own high school years. This made me wonder whether the COVID-19 pandemic, which disrupted communication and social interactions, had contributed to this trend. During my two years of training, I repeatedly observed local students actively and enthusiastically engaging in their activities. Through this experience, I came to understand that as educators, our role is to foster an environment and atmosphere where students feel safe to break out of their shells and express their individuality. I strongly believe in respecting each student's unique character while also incorporating thoughtful encouragement and tailored guidance into both daily interactions and classroom instruction. This experience not only provided an opportunity to improve my teaching beyond the classroom but also offered a valuable chance to reflect on my qualities as an educator.

6. Acknowledgements

In closing, I would like to extend my heartfelt gratitude to Dr. Hiroko Shibakawa, Specially Appointed Assistant Professor at Okayama University's Faculty of Education, for planning and organising this training programme. I am also deeply appreciative of the International Islamic University Malaysia, National SMK Batu Muda, SIKL, and other collaborating institutions for their invaluable cooperation. Additionally, I would like to express my sincere thanks to the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) and the Japan Society for the Promotion of Science (JSPS) for their generous support through the Grants-in-Aid for Scientific Research (KAKENHI) programme.

『マレーシア訪問と姉妹校協定までの道のり』

岡山県立矢掛高等学校 国語科 三宅あさひ

このたび私はマレーシアを訪問し、現地の教育や文化について学ぶ貴重な機会を得ました。本訪問は単なる海外視察にとどまらず、本校が国際交流の可能性を模索する上での重要な一歩でもありました。その結果、訪問先の一つであるバトゥムダ高校との間で姉妹校協定を締結する運びとなりました。本稿では、訪問を通じて得た学びや所感、ならびに協定締結に至るまでの経緯についてお伝えします。

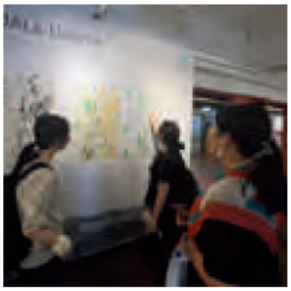
1 マレーシアでの温かい経験

出発前の私は不安を抱いていました。同行する先生方は豊富な経験や堪能な英語力を有する方ばかり。一方私は高校教員1年目であり、英語力にも自信がありません。私が同行する意義があるのだろうかと考えることもありました。しかしながら現地に到着すると、その不安は次第に払拭されました。マレーシアの街並みは明るく、会う人々が皆温かく接してくれました。市場や店舗では、店員たちが笑顔で楽しそうに働く様子を見て心が和みました。こうした環境の中で、この地での経験を最大限に吸収し日本の教育現場に生かしたいという意欲が芽生えました。

2 現地および日本の教員との交流

訪問中に最も印象深かったのは、同行した日本の教員や現地の教員との対話でした。
マレーシアの教員は、生徒の主体性を引き出す高度なファシリテーション能力を持っており、その姿に感銘を受けました。例えば、質疑応答で手が上がらない状況があった際、ある教員が1人の生徒に発言を促したことをきっかけに、教室全体が活発な意見交流の場へと変わりました。その様子を目の当たりにし、生徒の特性を的確に理解した指導の在り方に学ぶべき点が多いと感じました。また、学校を案内してもらいながら、現地の教員と「生徒が廊下などにゴミを捨ててしまう場面はどこの学校でも共通の課題ですね」といった何気ない会話を交わしたことも、教育現場に共通する問題意識を共有する機会であり、実際に現地で会えたからこその貴重な体験でした。
同行した日本の先生方も、探究活動や国際交流の分野において高い専門性を有しており、その知見は私にとって非常に刺激的でした。カフェやアート展を訪れた際も、探究活動の意義や国際感覚をどのように育むかといった議論が交わされ、私はその内容を記録していました。こうした交流の積み重ねが、教育者としての視野を広げる大きな契機となりました。

3 バトゥムダ高校との出会いと姉妹校協定締結



訪問校の中でも、特に印象に残ったのがバトゥムダ高校でした。同校では、持続可能な社会の実現に向けた主体的な探究活動が展開されていました。本校においても「やかげ学」という地域体験型の探究活動を実施しており、両校の取り組みには共通点が多くありました。バトゥムダ高校の生徒に対し、「やかげ学」についてプレゼンテーションを行ったところ、彼らは地域に出向いて学ぶ活動に新鮮な関心を示していました。そこで、「バトゥムダ高校の生徒が地域の小学校と交流することについてどう思うか」と尋ねると「ぜひ実施したい」と前向きな意見が寄せられました。この他にも、両国・両校の共通点と相違点を認識することができ、異なる教育や文化を相互に理解し交流する意義を改めて実感しました。
さらに、ナゼリ校長をはじめとするバトゥムダ高校の教員は、学校全体や生徒一人ひとりの可能性を引き出すことに強い情熱を注いでいました。その教育理念や学校の雰囲気は本校の目指す方向性と合致しており、この共通点が姉妹校協定締結への大きな後押しとなりました。
なお、姉妹校協定は来年度の締結を予定しています。今後は、オンラインでの交流や交換留学を通じて、両校の生徒が文化や価値観を共有しながら学び合うことを目指すとともに、教員間の交流を通じた教育の質の向上にも取り組んでいきます。

4 終わりに

今回の訪問を通じて、教育の現場が国や文化を超えて多くの共通点を持つことを実感し、それぞれの強みを学び合う意義を深く考えさせられました。特に、現地および同行した教員との対話から得た知見は、今後の教育活動における指針となるものです。また、当初は不安を抱えていたものの、本訪問が本校とバトゥムダ高校の交流を深める一助となれたことを大変嬉しく思います。

最後に、本訪問を支えてくださったすべての関係者の皆様に心より感謝申し上げます。姉妹校協定が両校にとって実り多いものとなり、未来を担う生徒たちが国境を越えて活躍する礎になることを願います。

My Visit to Malaysia and the Path to a Sister School Agreement

Okayama Prefectural Yakage High School, Japanese Language Department
Asahi Miyake

I recently had the invaluable opportunity to visit Malaysia, where I gained firsthand insight into its education system and culture. This visit was not merely an overseas study tour; it also marked a significant step in our school's pursuit of international exchange opportunities. Consequently, we successfully established a sister school agreement with SMK Batu Muda, one of the institutions we visited. In this article, I will share the insights and reflections gained during the visit, as well as the journey that led to the signing of the agreement.

1. Warm Encounters in Malaysia

Before my departure, I was filled with uncertainty. The teachers accompanying me were all highly experienced and fluent in English, whereas I was only in my first year as a high school teacher and lacked confidence in my language abilities. At times, I questioned whether my presence on this trip was truly meaningful. However, once we arrived in Malaysia, my initial anxieties gradually faded. The streets were vibrant, and the people we met welcomed us with warmth and kindness. At markets and shops, I found comfort in watching the shopkeepers work cheerfully, their faces lit up with genuine smiles. Being immersed in such an environment fuelled my determination to absorb as much as possible from this experience and apply it to Japan's educational field.

2. Interactions with Local and Japanese Educators

The most memorable aspect of my visit was the conversations I had with both the Japanese teachers who accompanied me and the local educators in Malaysia.

The Malaysian teachers exhibited exceptional facilitation skills, adeptly drawing out students' initiative, which left a strong impression on me. For instance, during a Q&A session where no students initially raised their hands, one teacher gently encouraged a single student to speak. This small intervention sparked a transformation, turning the classroom into a vibrant space for discussion. Witnessing this firsthand, I realised there was much to learn from an approach that accurately understands students' individual traits. While being shown around the school, I had casual conversations with local teachers, such as how students littering in hallways is a common issue in schools everywhere. This was an opportunity to share awareness of common challenges in education, and it proved to be a valuable experience made possible by meeting these local teachers in person.

The Japanese teachers accompanying me were highly specialised in inquiry-based learning and international exchange, and their insights were deeply stimulating. Even when visiting cafés and art exhibitions, we discussed the significance of inquiry-based learning and fostering an international mindset, and I took notes during these conversations. This significantly broadened my perspective as an educator.

3. Meeting SMK Batu Muda and Signing a Sister School Agreement

Among the schools we visited, SMK Batu Muda left the strongest impression on me. The school actively engages in inquiry-based learning aimed at creating a sustainable society. Similarly, our school conducts a region-based inquiry programme called Yakage Learning, and I found many commonalities between the initiatives of both schools. When I gave a presentation to SMK Batu Muda students about Yakage Learning, they showed great interest in the concept of learning by engaging with the community. When I asked, 'What do you think about SMK Batu Muda students interacting with local primary schools?', they responded enthusiastically, expressing their eagerness to participate. In addition to this, I was able to recognise both the similarities and differences between our schools and countries, reinforcing the significance of cultural and educational exchange.

Furthermore, Headmaster Nazeri and the teaching staff at SMK Batu Muda demonstrated a deep passion for unlocking the full potential of both the school as a whole and each individual student. Their educational philosophy and the school environment closely aligned with the vision of our institution, which was a major driving force behind the sister school agreement.

The agreement is scheduled to be formalised in the next academic year. Moving forward, we aim to foster mutual learning between students through online exchanges and study-abroad opportunities, encouraging them to share cultures and values. Additionally, we will work to enhance the quality of education through teacher exchanges.

4. Conclusion

Through this visit, I gained a strong sense of the many commonalities in education that transcend national and cultural boundaries, which deepened my appreciation for the significance of learning from each other's strengths. In particular, the insights gained from discussions with both local and accompanying teachers will serve as valuable guidance for future educational initiatives. Although I initially had some concerns, I am truly delighted that this visit has helped strengthen the ties between our school and SMK Batu Muda.

Finally, I would like to express my sincere gratitude to everyone who supported this visit. I hope that the sister school agreement will be a fruitful endeavour for both schools and serve as a foundation for students—the leaders of the future—to thrive beyond borders.

This report is published with the support of JSPS KAKENHI Grant Number 21K13574: Research Project "Development of a Pluralistic Learning Model to Promote the Formation of a Community of Practice for ESD Teacher Education."

"Okayama UNESCO School High School Network 2024 Report"
Edited by: Hiroko Shibakawa, ESD Collaboration Promotion Center, Graduate School of Education, Okayama University
Published by: Okayama UNESCO School High School Network / ESD Collaboration Promotion Center, Graduate School of Education, Okayama University
Address: 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530, Japan
Publication Date: March 2025
Editorial Assistance:
Okayama UNESCO School High School Network
Advisory Teachers
Next Generation UNESCO National Committee, Education WG, Kanto Kawakami (Student Staff)
Okayama UNESCO High School Network Student Staff

To conclude: Education serves as a powerful change agent, particularly for high school students, by fostering collaboration, sharing, and the development of both skills and heart. In today's rapidly evolving world, Education for Sustainable Development is crucial, allowing students to cultivate a mindset geared towards environmental stewardship and societal improvement. By nurturing creativity and imagination, we educators can inspire students to think outside the box and develop innovative solutions to complex problems. Effective communication becomes indispensable in this process, as it enables students to articulate their ideas and work together harmoniously. Through such a holistic approach, education empowers young individuals to become proactive contributors to a sustainable and equitable future.

この報告書は、JSPS科研費 21K13574：研究課題「ESD教師教育に向けた実践共同体を形成促進する多元的学習モデルの開発」の助成を受け、発行しています。

「岡山県ユネスコスクール高校ネットワーク　2024 報告書」
編著：岡山大学大学院教育学研究科　ESD協働推進センター　柴川弘子
発行：岡山県ユネスコスクール高校ネットワーク
岡山大学大学院教育学研究科　ESD協働推進センター
〒700-8530 岡山市北区津島中３－１－１

発行日：2025（令和7）年　3月

編集協力：
岡山県ユネスコスクール高校ネットワーク
顧問の先生方
次世代ユネスコ国内委員会　教育WG　川上　寛人（学生スタッフ）
岡山県ユネスコスクール高校ネットワーク　学生スタッフ